

英語の疑問表現学習上の問題点

築 城 真 市

This paper is to be understood as one of a series of inquiries into the problems possibly met by Japanese students in learning English, with special regard to what influences their mother tongue will exert on their study, on the assumption that the knowledge of a language already obtained might cause some or other conflicts in their new efforts to acquire a second language.

This paper aims at guessing the possible conflicts created by the similarities and differences between Japanese and English, limiting the discussion to the case of learning English interrogative expressions.

The items to be considered will be as follows: ---

1. Logic of Interrogative Expressions
2. Forms of English Interrogative Expressions
3. Forms of Japanese Interrogative Expressions
4. Yes-No Questions
5. Alternative Questions
6. Tag-Questions
7. X Questions
8. Indirect Questions
9. Pseudo Questions
10. Double Questions, Incomplete Questions, etc.
11. Verification

1. 疑問表現の論理

疑問表現は叙述文のような独立性を持たず、本質的には question—answer の“談話の流れ”の中に在る。言いかえれば、命令文に次いで最も行為的な表現である。唯命令文は非言語的な動作・行動を要求している

のに対し、疑問文は原則的には言葉による応答を求めている点に相違がある。Jespersen (1924) にも

A question also is a kind of request, viz. a request to tell the original speaker something, to give him a piece of information that he wants. ⁽¹⁾

とある。叙述文が「話者情報」を陳述するものであるのに対し、疑問文は「聴者情報」を求めるのである。もっとも Jespersen も同所で、

Questions again may range from virtual commands to polite prayers : the answer may be as it were exacted or humbly solicited. ⁽²⁾

と続けているように、疑問文が、単なる“聴者情報の求め”を越えて、或は命令・要求・共感の求めから驚き、勧誘・祈りに至るまでの多様な情感を担って発せられることも多い。

How do you do?	(あいさつ)
Who knows?	(否定)
Really?	(あいづち)
Will you stop talking?	(命令, 依頼)
Won't you have some?	(勧誘)
What? Is he here?	(驚き)

このような「見かけの疑問表現」は日本語でも軌を一にして多彩である。上の英文に相当するものを挙げて行くと、

お元気です ka。	(あいさつ)
誰が行くもの ka。	(否定)
ほんとです ka。	(あいづち)
話しをやめてくれない ka。	(命令, 依頼)
少しいかがです ka。	(勧誘)
何。彼がここに居るの ka。	(驚き)

のように、ほぼ同一のニュアンスを帯びている。しかし今はこれらの派生的な意味合いを示すものには触れないで、question-answer の本質

的な談話の流れの中での疑問表現, 即ち

[I ASK YOU] Who is he ?

と分析されるような場合のみに局限して, 論を進めたい。

Questions は本質的には, 当面の話題について, “addressee が speaker の持たない情報を持っている” と speaker が考え, その情報を求めるという人間行為である。しかもそれは単に「words による情報」を求めていることを本義とする。即ち厳密には

Questions→(1)言語による(2)聴者情報の(3)求め
という要素で構成される。従って言語的には,

(1) Sentence×Question [I ASK YOU]

の形態をとる。そしてこの Sentence は通常既に流れている談話の中に在る。(もっとも後述するように, 何の前提もなく, 突然談話を切り出す Questions も在るが)。従って談話を進めている speaker と addressee の間には, 当面の話題について共有する情報 (Presupposition) があり, しかもその様態は多様である。Questions はこの共有情報の上立って新らしい情報を求める。従って Questions の実質内容をなす Sentence には既に共有する情報部分と新らしく聴者に求める情報部分とが混在するのが一般である。この共有部分を Presupposition (前提) とし, 聴者情報を求めている部分を Focus (焦点) と呼ぶことにすれば

(2) Sentence→Pres + Focus

Where: Pres=Presupposition

である。従って (1), (2) を合成して

(3) (Pres + Focus) × Question [I ASK YOU]

を得る。そして実際には, この Pres 部分は Question の対象外であるから, Question Embedding とも言うべき文法操作を加えて

(4) Pres + Focus × Question [I ASK YOU]

という概念の分析過程が得られよう。

所で speaker の側から, この Focus の呈示のし方が2つある。その1つは白紙のまま呈示して, 即ち変数 x として呈示し, その値を相手に求

める形式と、他の1つは、一応 **speaker** 側で1つの値を呈示して、その真偽の判断を相手に求める方式とである。前者が所謂 **X Question**、後者が **Yes-No Question** である。従って **Focus** の呈示のし方によって **Question** [I ASK YOU] の意味内容は

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{I ASK YOU what } x \text{ is.} \\ \text{I ASK YOU whether it is true.} \end{array} \right.$$

の2義に分れる。

実例に従ってもう少し詳しく調べて見よう。

(5) Jack kissed Betty.

を上述の **Sentence** と考えて、これを談話の流れの中に置くと、

(5a) Jáck kissed Béttý.

(5b) Jáck kissed Betty.

(5c) Jack kissed Béttý.

(5d) Jack kissed Betty.

(5e) Jáck kissed Béttý.

などが考えられる。

これらは強勢を置かれた語が「新らしい情報」であり、強勢のない語は「古い情報」即ち共有情報である。従ってそれぞれ

(5a') Something happened.

(5b') Someone kissed Betty.

(5c') Jack kissed someone.

(5d') Jack did something to Betty.

(5e') Someone kissed someone.

を **Pres** として持っている。今説明の便宜上 (5b') の場合を先ずとりあげて論を進めたい。

(5b') Someone kissed Betty.

の焦点部分 **Someone** を変数と考えると、この文は

(5b'') $f(x)$ [x kissed Betty]

であり、この **Sentceen** に基づく **Question** は前述(4)を適用すると、

(5b''') x [I ASK YOU] kissed Betty.

となる。所で x を x のままで呈示すれば

(ア) x [I ASK YOU] \rightarrow I ASK YOU what x is.

であり、 x に speaker が不確かな 1 つの値, Jack を呈示すれば

(イ) $x=Jack$ [I ASK YOU] \rightarrow I ASK YOU whether it is true.

の意味が付与される。

実際の言語では x [I ASK YOU] は、 x の持つ $\langle +human \rangle$ の特性から疑問詞 who が選ばれて

(ア) \rightarrow Whó kissed Betty?

が表層化して来る。(イ)の方は疑問変形の結果

(イ) \rightarrow Did Jáck kiss Betty?

を生ずる。(その過程の詳細は次章で述べる)

同様に (5c) に就ても

(5c'') $f(x)$ [Jack kissed x]

(5c''') Jack kissed x [I ASK YOU]

(ア) x [I ASK YOU] \rightarrow I ASK YOU what x is.

(イ) $x=Betty$ [I ASK YOU] \rightarrow I ASK YOU whether it is true.

から表層構造

(ア) Whó(m) did Jack kiss?

(イ) Did Jack kiss Béttý?

を得る。その他の場合に就ても同様であるから一々は触れない。唯 (5a) の場合、これが叙述文ならば、上掲したように something happened. を前提とする場合と、全然前提もなく突然の話題提出の場合とが考えられるが普通である。しかし Question を発する situation からすれば、当然何らかの前提がなければならない。従って

(5a'') $f(x)$ [x happened]

とするのが妥当であろう。続いて

(5a''') x [I ASK YOU] happened.

ア. x [I ASK YOU] \rightarrow I ASK YOU what x is.

イ. $x = \text{Jack kissed Betty. [I ASK YOU]} \rightarrow \text{I ASK YOU}$
whether it is true.

を経て

(7) What happened?

(1) Did Jack kiss Betty?

を得ることに変わりはない。

この論理は日本語の場合にも適用する。

(6) 太郎が花子を愛した。

を談話の流れの中に入れれば、

(6a) 太郎が花子を愛した。

(6b) 太郎が花子を愛した。

(6c) 太郎は花子を愛した。

(6d) 太郎は花子を愛した。

(6e) 太郎が花子を愛した。

が得られる。(もっとも強勢の性質には英語と若干の相違が見られるが、本論に直接の係わりはない。また主語「太郎」の格助詞が強勢の有無と関連して「が」「は」と使い分けられるが、詳しくは触れないでおく)

そして例えば(6b)は

(6b') 「誰か」が花子を愛した。

(6b'') $f(x)$ [xが花子を愛した]

(6b''') x [I ASK YOU] が花子を愛した。

ア. x [I ASK YOU] \rightarrow [I ASK YOU] x は誰か。

イ. $x = \text{太郎 [I ASK YOU]} \rightarrow \text{[I ASK YOU]}$ それで正しいか。

を経過した上で、言語的には

ア. 誰が花子を愛した (の) ka。

イ. 太郎が花子を愛した (の) ka。

と表層に出てくる。他の場合も同様で、一々触れない。(尚ア.の場合は表層化の過程で

花子を愛したのは誰 ka。

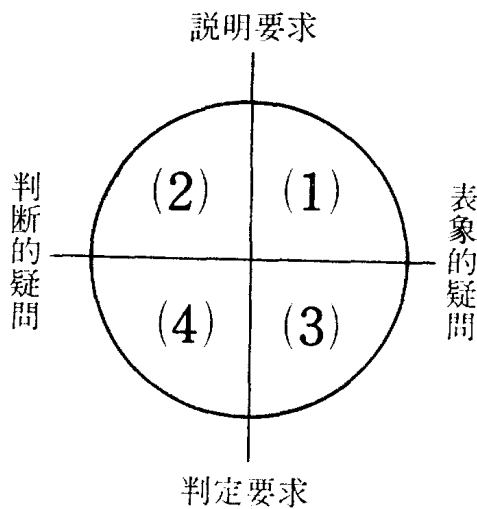
という文も生成される。それは英語の場合でも

Who was it that kissed Betty?

が生じ得るのと同じである。これも後述に任せて今は触れない

国語学辞典 (1955) では

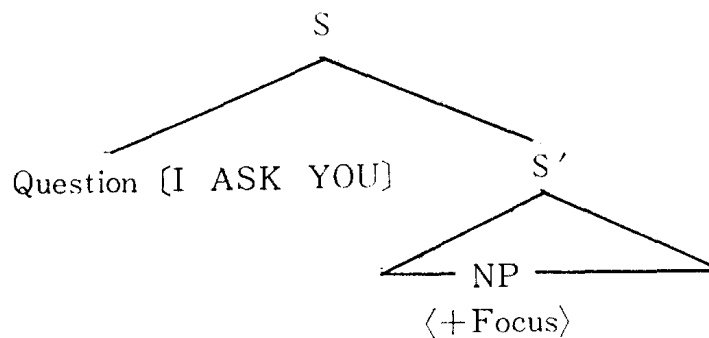
- 1. 誰? 2. お使いは誰?……説明要求の場合
- 3. 行くか? 4. 君は行くか?……判定要求の場合



と例示した上で、左図のように図示してある。⁽³⁾ 何れにせよ、疑問表現の根本的な理念は、個別言語の垣根を越えた **universal** な言語事実である。

2. 英語の疑問表現の形態

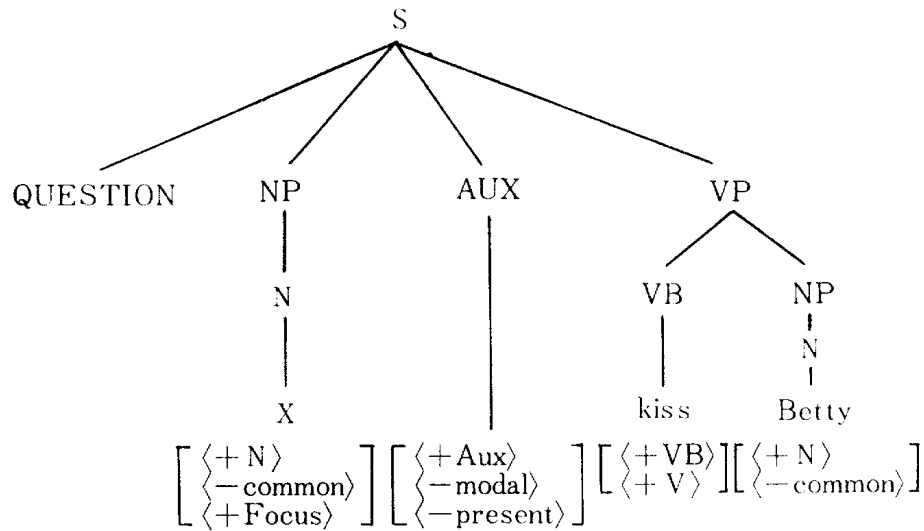
上述したように Questions は Sentence の中の Focus 要素と関連して疑問文を作る。その concept structure は下図のようである。



(<+Focus> の特性をもつに至る NP は1つとは限らぬし、また VP であったり、S' の全要素であったりすることは前述した通りである)

今煩雑を避けるために、この概念を抽象記号 QUESTION に託して、次のように深層構造に組み入れる。

(7) Who kissed Betty?



この深層構造から次の変形手順が踏まれる。

- (i) 先ず QUESTION に誘発されて、疑問変形が行われ、Aux が主語 NP の左へ出る。
- (ii) 次に x [$\langle +\text{Focus} \rangle \dots$] は語彙的には所謂 $\langle +\text{WH} \rangle$ の特性であり、lexicon から

$\langle +\text{N} \rangle$	→ who
$\langle +\text{pronoun} \rangle$	
$\langle +\text{human} \rangle$	
$\langle +\text{WH} \rangle$	

を得る。

- (iii) 更に WH 変形により who が文頭に出る。
(即ち上図の NP + Aux の語順へ戻る。)
- (iv) AUX が $\langle -\text{modal} \rangle$ であるため、時形の特徴 $\langle -\text{present} \rangle$ は、VB が担って kissed となる。
- (v) 抽象記号 QUESTION は delete されて

Who kissed Betty?

と表層構造化する。

尚音韻上、強勢の残る模様を図式化すると次のようになる。

Question [\acute{J} ÁSK YÓU] x kissed Betty. (質問の内容文)
 someone kissed Betty. (前提)

→ Question [Í ÁSK YÓU] (Jáck kissed Betty.)

→ Did Jáck kiss Betty?

となる。

但しこの例は深層で Jack に〈+Focus〉が与えられていたものである。
もし文の要素のすべてに〈+Focus〉が与えられる場合は

Question [Í ÁSK YÓU] Jáck kissed Bétty. (質問の内容文)
Something háppened. (前提)

の形となり、分子と分母に共通要素はないため

→ Question [Í ÁSK YÓU] (Jáck kissed Bétty.)

→ Did Jáck kiss Bétty?

となるのは当然である。

尚文の intonation の問題もあるが、日・英比較の段階で、各形式毎に検討する。

3. 日本語の疑問表現の形態

日本語の疑問表現を担う最も一般的な形態は、文末に添えられる終助詞“ka”である。もっとも

誰? 行ったの?

のように単に tone (上昇調) だけでも十分に疑問の意味表現は出来る。

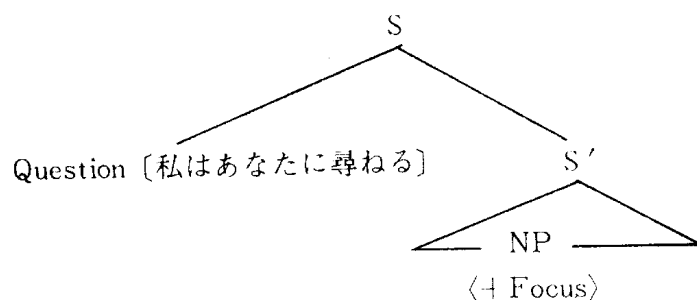
英語にも

He went? ♪ You did it? ♪

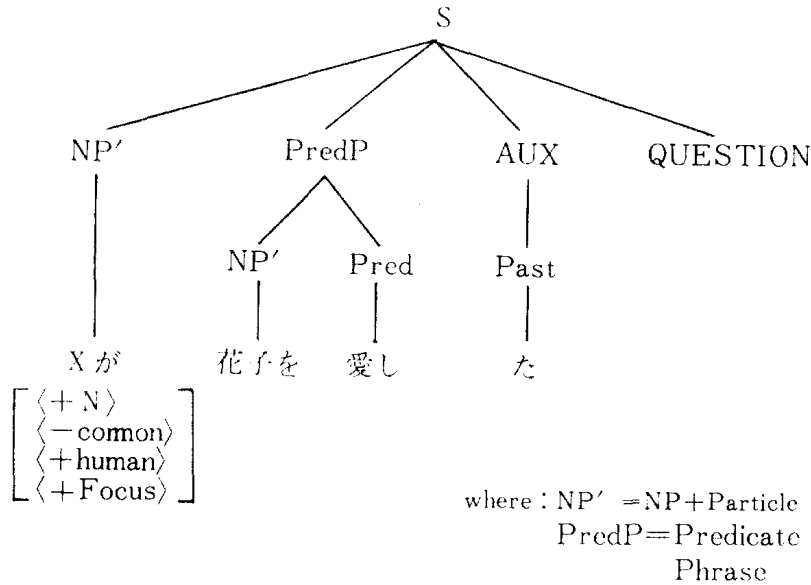
のように上昇調のみによる疑問表現はある。疑問表現の本質的特徴は形態よりも、寧ろこの音調であるかも知れないが、とりあえずはその形態部面に焦点を絞ってゆく。

(9) 誰が花子を愛した (の) ka。

その concept structure は日本語でも、英語の場合と変りはなく



であるが、これを QUESTION という抽象記号に託して深層構造に組みこむには、後置した方がよさそうだ。



この深層構造から変形によって表層化する手順は極めて簡明である。即ち

- (i) x [$\langle +N \rangle$, $\langle -common \rangle$, $\langle +human \rangle$] に $\langle +Focus \rangle$ の特性が添えられ、QUESTION に触発されて語い「誰」が与えられる。
- (ii) 疑問変形により QUESTION が “ka” にとって代られ、消去される。

その結果「誰が花子を愛した ka。」が得られる。(尚日本語の特徴として、文を先ず名詞化し、それに対して否定したり、疑念を表わしたりすることは珍らしくない。

太郎が花子を愛した の ではない。
 文 名詞化 断定 提題 否定
 太郎が花子を愛した の か。
 文 名詞化 疑問

これらは英文の

It is not (true) that Taro loved Hanako.
 Is it (true) that Taro loved Hanako?

に相当すると言える。何れにせよ ka の前に存在し得る「の」については、煩雑さを避けて一々触れないことにする)

所で Presupposition による stress の消失の様子は英語の場合の概念式がそのまま適用する。即ち

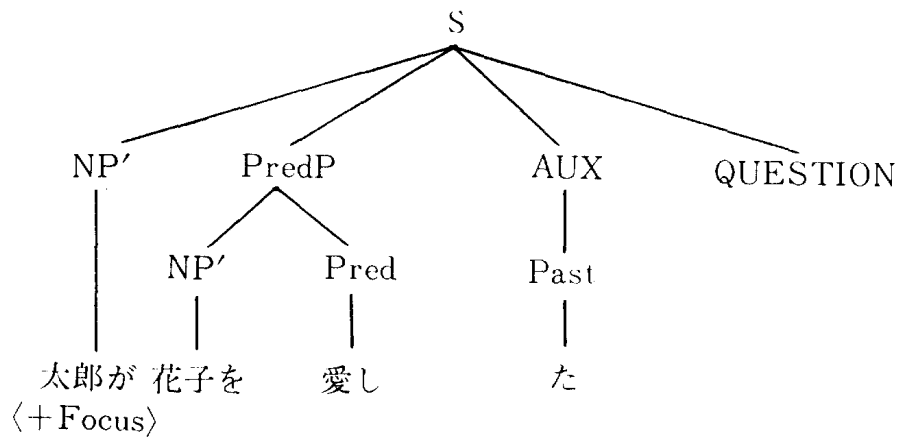
Question[私はあなたに尋ねる] x が花子を愛した。 (質問の内容文)
 誰かが花子を愛した。(前提)

→ Question [私はあなたに尋ねる] (\dot{x} が花子を愛した)

→ 誰が花子を愛した ka。

Yes-No Questions の場合は更に簡明である。

(10) 太郎が花子を愛した (の) ka。



を深層構造に持ち、

(i) QUESTION が ka にとって代られ、消去されるだけの変形で表層に出る。

強勢の概念式も

Question [私はあなたに尋ねる] $\dot{\text{太郎が花子を愛した。}}$
 $\dot{\text{誰かが花子を愛した。}}$

→ Question [私はあなたに尋ねる] ($\dot{\text{太郎が花子を愛した。}}$)

→ $\dot{\text{太郎が花子を愛した}}$ ka。

となることに変わりはない。尚、文の全要素に強勢がある場合も

Question [私はあなたに尋ねる] $\dot{\text{太郎が花子を愛した。}}$
 $\dot{\text{何かが起った。}}$

→ Question [私はあなたに尋ねる] ($\dot{\text{太郎が花子を愛した。}}$)

→ $\dot{\text{太郎が花子を愛した}}$ (の) ka。

と、英語の場合と何の変りもない。

以上で日・英両国語の疑問表現について、その理念と形態についての本質的な部面を見た。次には、日本人学生が英語の疑問表現を学習する際に

予見される問題点を、個々の疑問表現形態に即しつつ、特に両国語間の異同からもたらされる促進・干渉の観点から、考えてみたいと思う。

4. Yes-No Questions

Yes-No Questions は speaker が与える変数の1つの値について、addressee に真偽の判断を求める形式のものである。Nexus Questions とか、General Questions, Total Questions などとも呼ばれる。そしてこの表現を学習するに際して、日本人学生が直面する最も大きな問題点は、日・英両国語の形態差に在る。既に述べたように、日本語の Yes-No Questions は、普通の叙述文の最後に「疑問の終助詞」ka を添え（て上昇調で発音す）るだけでよいが、

（太郎は花子を愛している）ka?ノ

英語の場合には次のような複雑な多様さを見せる。即ち、

- (i) Aux が NP の左へ出る。
- (ii) Aux が <-modal> の特性をもつ場合は tense を担うため “do” が導入される。
- (iii) be 動詞は殆ど Aux と同じ働きをする。
（英国では「所有」を表わす have も同様）

である。(i)の語順変化は一応困難ではあるが、語順変化だけならば、さ程の障害にはならない。しかし(ii)の do の導入は実質的には NP+VP の語順を動かさず、唯単に NP の前に do を付加する形となり、(i)の語順変化の学習と衝突する。その上この do が tense を担い、かつ NP の人称特徴 <+α peson> により do, does, did と分れるのだから困る。更に事を複雑にするのが(iii)の be 動詞の例外的動きである。(英国では更に have が加わる。しかも「所有の」have だけで、‘take’の意味の have は一般動詞なのだから、ややこしい) 主な場合の形態を並べてみると、

- (a) be, have が本動詞の場合

Is he a teacher?ノ

(Have you any sisters?ノ (英)

(Do you have any sisters?ノ (米)

Do you **have** a bath every day? ♪ (英・米)

(b) be, have が助動詞の場合

Are you going abroad? ♪

Have you finished your breakfast? ♪

(c) その他の助動詞の場合

Shall I do it for you? ♪

Might I go out now? ♪

(d) 一般動詞の場合

Does he **like** it, too? ♪

Did you ever **see** it? ♪

幸い tone はすべて上昇調で、日本語と変わらないのは救いであるが、この形態上の多様さは、簡明な日本語の疑問表現に馴れた学生にとって大きな干渉となろう。そして

***Do** he like it, too?

***Will** he **comes**, too?

***Do** he **likes** it, too?

***Did** he **have** come, too?

***Likes** he it, too?

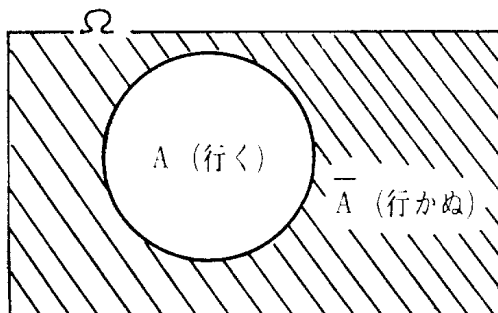
などの非文が続出することが十分予想される。

Yes-No Questions のもつ意味については、日英両語の間に大きな差異はないように見えるが、addressee の側からの受けとり方は、その意識の上で大きな差異がある。その差異は、否定形の Yes-No Questions に対する応答の中で明瞭になる。

もともと論理的には Yes-No Questions は肯定形も否定形も意味内容は変わらない筈である。

ア. Are you going abroad?

イ. Are you not (Aren't you) going abroad?



の2文は論理的には同義である。左図のように、「行く」「行かぬ」は全集合を2分する部分集合だから、一方の否定は直ちに他方(その余集合)を意味する。

「行くか」と尋ねても「行かぬか」と尋ねても結果は変わらない筈である。しかし言語事実は論理と完全には一致しない。not bad は good と同義ではない。「暑くない」は「寒い」と同義にはならない。言語の否定形は、直ちに対極を指示せず、その「どちらでもない部分」をも含めて、あいまいさの中で、婉曲性を醸成する。その意味合いには〔+periphrasis〕の意義素が加わるのである。特に否定形の疑問文では「否定の応答」への期待や、惧れを多分に持っているか、あるいは逆に「否定の応答」を抑えこんで、肯定への誘いの情意を帯びるか、何れにせよ、否定への関心が強く存在し、肯定形の疑問文のような直線性がない。⁴⁾

後述する Tag-Questions でも

(You like it, don't you? (Yes, I do. を期待)
 (You don't like it, do you? (No, I don't. を期待)

の差があるが、同様に

Isn't that nice? には (= That is very nice.)

の意味合いが含まれ

Won't you have some coffee?

は Yes, I will. を期待した「誘い」となる。ただこの事は日本語でもほぼ完全に言えることで何の問題にもならない。

それはよいじゃない ka。(=よい。)

コーヒーを飲まない ka。(誘い)

塩をとってこない ka。(依頼)

(このような意味の転化については Pseudo Questions の項で詳述する。)

今問題になるのは、この否定形疑問文に対する応答の相違である。即ち

Don't you like coffee? (コーヒーはお好きでないのです ka。)

{ Yes, I do. (いいえ, 好きです。)
 { No, I don't. (はい, 好きではありません。)

に於ける Yes, No と「はい」「いいえ」の逆になる事実である。これは次のように「Questions の受けとり方」の意識の差を示すものであろう。

(a) 英文の応答は、質問文の肯定形・否定形に無頓着に、ただ「VP

内容のみ」を受け入れ、No, 否定形. Yes, 肯定形. と自分の文を作る。自己完結的な応答になる。

(b) 日本文の応答は、質問文をその形態（肯定・否定）を全的に受け入れ、先ずその文に即して True-false の判断を「いいえ」「はい」で示す。しかる後に自分の説明文を添える。謂はば相手対応的な応答になる。

この理由を

(ア) 自己中心的な欧米型と相手中心的な日本型の国民性の意識の表われ

(イ) 質問文から ka を除けば、そのまま叙述文になる日本語の簡明さが、

相手の文を透明に伝え得るので、全的に受け入れ易いため

と見るのは見当違いであろうか。

何れにせよ、この事実から考えると、英語の Questions を受けとる addressee の意識の中では VP を中心とする内容事実のみが、肯定・否定の別なく、直接的に受けとられていることが分る。そして、これも大きな学習上の干渉源となることは確かである。

以上を纏めて表示すると次のようになる。

		英 語	日 本 語	差異度	学習困難度	
					理解	発表
F (形態)	1. (a) Aux+NP の語順になる		1. 文末に ka を付す (no, ya もある)	大	中	大
	(b) Auxが<-modal>のときは do が導入され tense を担う					
	(c) be, have, には特別な扱いがある (英米の差も含めて)		2. 最近 “?” を付す傾向が出て来たが、本質的なものではない	中	小	小
	2. 文末に “?” を付す		3. 上昇調で発音される	小	小	小
	3. 上昇調で発音される					
M (意味)	1. 文意の真偽について判断を求める		1. 同じ	小	小	小
	2. 否定疑問文は一般に情意性を伴う		2. 同じ	小	小	小
	3. 応答文の Yes, No は、応答文自体の肯定否定と一致する		3. 応答文の「はい」「いいえ」は質問文の真・偽と一致する	大	中	大
D (分布)	1. 動詞の種類 Aux の特性によって、形態差がある		1. 対応する事実はない	大	中	大

以上の事実から判断すると FMD 率⁽⁵⁾ は 1-2, 学習の難易度は, 形態上の大きな差異があっても理解学習の場合は, 既に正しい形態で与えられて居るので, さほど困難はない。意味も与えられる立場からは殆ど差異がないので, 理解学習の困難度は A レベル⁽⁶⁾ に相当する。しかし発表学習となると, この英文疑問表現の形態上の複雑さと, 応答の Yes, No の使い分けの困難さなど, 非文へ落ちこむ陥穽は多いので, C レベルと判定される。

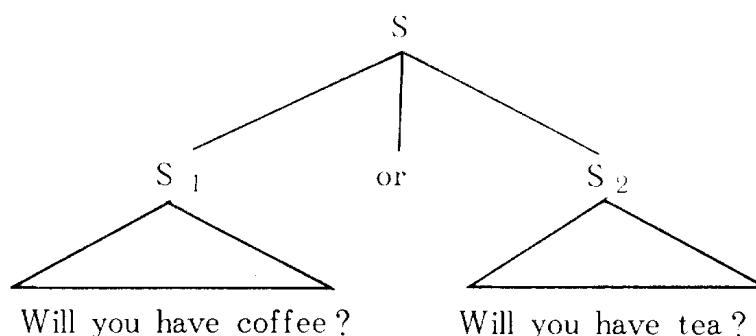
5. Alternative Questions

2つの項目を呈示して, addressee にその何れかの選択を求める疑問文を Alternative Questions と言う。

(11) Will you have coffee ↗ or tea? ↘

(コーヒーを飲みます ka, それともお茶にします ka。)

これは生成的には, 2つの Yes-No Questions の合成と考えられる。即ち,



従って S₁, S₂ は概して類似した文である場合が多く, 重複部分が delete される(上例では Will you have)。もっともこの類似度は多様で,

Did you buy a steak ↗ or did the girls go to the movie last night? ↘

では構文に comparable elements を欠き, 不自然のそしりは免れないが,

Did you buy a steak ↗ or (did you) eat noodles? ↘

Did you buy a steak[↗] or did the girls buy it?[↘]

(Did you[↗] or the girls[↘] buy it?)

のように or で繋がれる選択肢が comparable な要素である限り、Alternative Questions は成立する。

これは選択肢を抽出して後置し、Which で選択を呼びかける X Question (後述) と同じ姿勢のものである。

(12) Which will you have,[↘] coffee[↗] or tea?[↘]

(コーヒーか紅茶か、どちらを飲みます ka。)

これら (11), (12) の2文のどちらからも

Coffee[↗] or tea?[↘]

の省略形が導かれることから見ても、2文の同義性がうなずかれよう。

ところで日本語では、or が「か」「それとも」「または」など多くの該当語があり、英語の or のように決定的ではないし、構文自体も

コーヒーを飲みます ka,[↗] それとも紅茶。[↗]

コーヒーを飲みます ka,[↗] 紅茶を飲みます ka。[↗]

コーヒーを飲みます ka,[↗] それとも紅茶にします ka。[↗]

のように、かなり選択肢の対照的抽出が loose で、前肢と後肢に英語ほどの明確な並列意図が見られない。

この質問形式には Yes, No で答えられないのは論理的に必然のことで、この点は日・英両国語で差異はない。

しかし tone は英文が^{↗↘}と上昇調で前肢を問いかけ、下降調で後肢を付加するのに対して、日本語では^{↗↗}と両肢とも上昇調になるのが一般である。(もっとも後肢の上昇調は地域差・個人差のある所で、一概にはきめつけられない)

この点英文では A[↗] or B[↘] と一つの表現に纏まろうとする意図が見られるが、日本文は上述したように A[↗] or B[↗] とそれぞれ個別の Yes-No Questions の合成としか意識していないことを物語っているようである。(日本文でも A[↗] or B[↘] と発音する場合には、英文と同じように、一つの「纏まった表現」の意識があるようだ)

以上を纏めると下表のようになる。

	英 語	日 本 語	差異度	学習困難度	
				理解	発表
F	1. or で2つの Yes-No Questions をつなぐ	1. 「か」「それとも」などでつなぐ	小	小	小
	2. 重複要素は省略されることが多い	2. 同じ	小	小	中
	3. intonation は ↘ ↙	3. intonation は ↗ ↘ が一般	中	小	中
M	1. 選択肢を呈示して、聴者の選択・判断を求める	1. 同じ	小	小	小
D	1. 前肢と後肢に comparable な要素がある	1. 同じ (但しややルーズ)	小	小	小

FMD 率は、音調の面で若干の微差が見られる他は、殆ど差異がないので 3-0。学習困難度も理解学習では Yes-No Questions の理解困難度の上に上載せする程の困難は無いので A レベル。発表学習になると、重複要素の省略のしかた等に若干の困難が予想されて B レベルか。

〔注意〕 上記の FMD 率や困難度評価は Yes-No Questions の上に上載せする部分、即ち純粹に Alternative Questions に関わる部分だけを対象とする。

6. Tag Questions

Yes-No Questions の変形として、叙述文の後へ軽い省略形で addressee の確認を求めたり、同意を期待する疑問表現がある。付加疑問 (Tag Questions) とか分離疑問 (Disjunctive Questions) とか称せられる。

(ア) 相手の「確認」を求めるもの (上昇調)

(13)(a) You like it, ↘ don't you? ↗

(b) You don't like it, ↘ do you? ↗

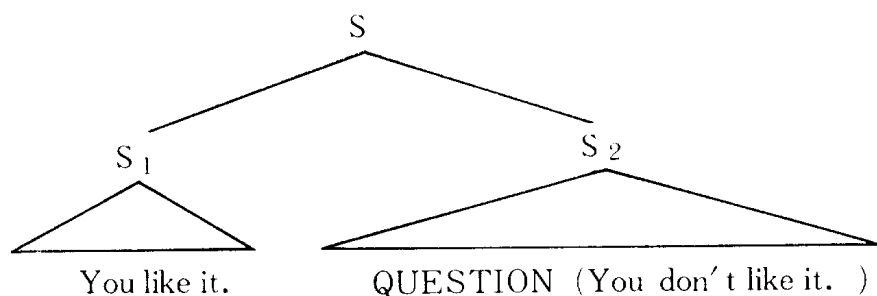
(イ) 相手の「同意」を期待するもの (下降調)

(14)(a) You like it, ↘ don't you? ↘

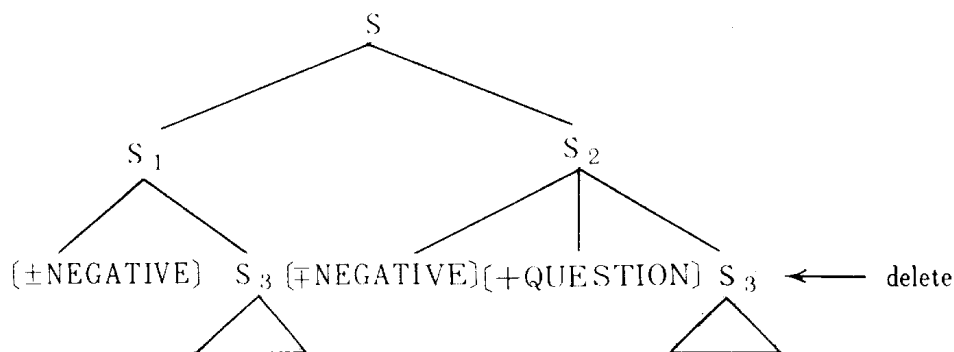
(b) You don't like it, ↘ do you? ↘

何れもまず叙述文（否定・肯定）で自分の一応信ずることを開陳し，その若干の疑念に対して確認もしくは同意を求める。その疑念の意識が強ければ，付加される疑問文は普通の **Yes-No Question** の息吹きを色濃く残して上昇調の **tone** となるし（確認の求め），疑念の意識が殆どなく，確信に近づけば，もはや付加される疑問文は単に形式となり，下降調の **tone** となる（同意の求め）。

その形態も元来，(13(a))を例にとれば



という深層構造を持つものであるから， S_2 は S_1 と同一の文に謂わば $[\pm\text{NEGATIVE}][+\text{QUESTION}]$ の変形を加えたものに過ぎない。従って大巾な省略が行われ， $[\pm\text{NEGATIVE}]$ と $[\text{QUESTION}]$ のみが表現に残る形となる。一般化して示せば



の概念構造をもっている。

従って S_2 は $[\text{QUESTION}]$ で **Aux+NP** となり， $[\text{NEGATIVE}]$ の場合は，更に **Aux** に **n't** が付加される。尚 **NP** は $\langle +\text{pronoun} \rangle$ の特性を持つ。その形は

Aux + NP ($\langle +\text{pronoun} \rangle$) (, did he?)

Aux (n't) + NP ($\langle +\text{pronoun} \rangle$) (, didn't he?)

の2形であるが，この **Aux** が曲者で，

are you, will you, did you, have you, can you, …

などの多彩さは後述する日本語の単純さに較べて頭痛の種となる。

さて日本語の場合を (13)(a) の訳文で考えてみよう。

- (15)(a) 君はそれが好きだ、↘(それとも)好きで(は)ない(の)(です)ka。↗
 (b) 君はそれが好きだ、↘そうで(は)ない(の)(です)ka。↗
 (c) 君はそれが好きだ、↘そうでしょう。↗
 (d) 君はそれが好きでしょう。↗

と並べてみると明らかなように(a)~(d)と次第に英文の形式から離れるにつれ、日本語らしくなっている。即ち英文と同形態(a)でも通ずるが、生硬でかつ前文と後文の独立性が強く出すぎて、英文の「確認・同意の求め」の軽さに欠ける。むしろ **Alternative Question** に近い。(b)では soo で前文を代表させ、後文の依存性は出たが、まだ重い。(c)文に至って漸く「軽さ」は十分になったが、やはり「2文」の感覚が顕著に感ぜられて、英文のような渾然たる単一性を欠く。(d)文になると始めて、「確認・同意」の求めとしての全一性を示すようである。

どうやら日本語の **Tag Question** は推量の助動詞 “oo” “yoo” に上昇調の **tone** を与えて表わされるもののようだ。もっとも “oo” “yoo” は直接用言につくよりは、“da” “de aru” “desu” の後へついて de-aroo, daroo, desyoo の形となることの方が多いが。

所で叙述文部分が否定形の場合を見てみると、(13)(b)に対応する日本文は

- (16)(a) 君はそれが好きで(は)ない。↘(それとも)好き(です) ka。↗
 (b) 君はそれが好きで(は)ない。↘そうで(は)ない(の)(です) ka。↗
 (c) 君はそれが好きで(は)ない。↘そうでしょう。↗
 (d) 君はそれが好きで(は)ない(の)でしょう。↗

(13)(b) と (16) の各文を比較して言えることは、

日本語の soo は前文全体を、肯定・否定の別も包含しつつ、全的に指示する。従って(15)も(16)も(b)は同形になる。即ち

S, ↘ not S↗。

で、S の内部形式が否定でも肯定でも構わないのである。ところが英文

FMD 率は明らかに 2-1。学習困難度は、その形態が日・英両国語で差異があっても、理解学習ではその認知は易しいので A レベル。発表学習になると

(i) 否定・肯定の反転

(ii) Aux の形の選択

でまごつく点は多く、

*You don't like it, *don't* you?

*You will do it, *don't* you?

などの非文は続出する惧れがあるので C レベルと思われる。日本文の簡明さがここでは干渉を生むことになる。

7. X Questions

Yes-No Questions が 文の全部又は一部について、その真偽の判定を求めたのに対し、X Questions は文の全部又は一部に関して *speaker* には未知の情報を *addressee* に求める表現である。

既に総論的に触れたように、文中の未知要素 (x) を疑問詞に変え、WH 変形を加えて文頭に置く。

- (17)(a) What happened? ↘
- (b) Who kissed Betty? ↘
- (c) Who(m) did Jack kiss? ↘
- (d) When did Jack kiss Betty? ↘
- (e) Where did Jack kiss Betty? ↘
- (f) How did Jack kiss Betty? ↘
- (g) Why did Jack kiss Betty? ↘

これらの疑問表現をそれぞれの観点から捉えて、X Questions, Special Questions, WH Questions などと呼ぶ。何れにせよ Yes-No Questions の知識の上に上載せを要求される知識は

- (i) 未知要素の WH 化
- (ii) WH語の文頭移動

だけのように見える(既述)。が実際にはいくつかの問題点加わる。順次洗い出してみよう。

先ず第一に格表示の問題がある。

日本語では、名詞(句)が文脈の中で働く関係機能は格助詞で統一的に示されるのに対し、英語では最も重要な主格関係、目的格関係は語順で示される。二次的な格関係は前置詞による。更に「'sの添加」などの語形変化によるものもあれば、全然別の語で示すものまであって、多彩を極める。

what=何, who=誰と割り切って学習する訳にはゆかない。例えば

何が what 誰が who

何の what 誰の whose

何を what 誰を whom

何で(道具格) with what 誰と(共格) with whom

何から(起点格) from what 誰から(起点格) from whom

と少し並べてみただけでも、「格」に於ける日本語の簡明さが英語学習の干渉源になることは容易に想像できる。(文頭の whom は文語的で、口語では who が愛用されるなど、更に慣用上の煩雑さが加わる)

第2の問題点は主語疑問文の形態である。主語疑問文では、一般動詞でも、疑問文の特徴と思われた do が導入されないからである。これも既に触れたように

(1) 叙述文 NP+Aux+VP. (△ kissed Betty.)

(2) 疑問変形 Aux+NP+VP? (Did △ kiss Betty?)

(3) WH変形 NP<+WH>+Aux+VP? (Who kissed Betty?)

の2段階を経て、もとの語順に戻り、Auxの後へすぐVPが続くため、tenseを担わせるdoの導入は、その必要が無くなるからである。この事実も、一般動詞のdoの導入に馴れるにつれ、やはり困難点として鋭い巖頭を突き出している。

第3の問題点は所謂疑問形容詞と呼ばれる形態である。

(18) Which season do you like best? ↘

これは生成的には冠詞変形で処理されるのが普通である。即ち

(d) **How old is your grandmother?** (いくつ…)

などに見られるように、英語では「How+数量に関わる形容詞(または副詞)」の形をとり、この形容詞(または副詞)は数量的に高い方をとる。(a)は **How young?** にならず、(b)は **How near?** にならない。(しかし(c)のように低い方と思われる形容詞(または副詞)をとる場合も、例外的な意味を背負って、存在するが)

それらに対応する日本語表現は、上記訳文が示すように、英語のような一定の形式はない。「どれくらい(の長さ、の時間、の年…)」が一番普通の形式であろう。この形式の学習も

{ **How tall are you?**
{ **How tall you are!**

の区別の認識と共に、やや学習にてこずる部面がある。

第5の問題点は疑問詞に格などを表わす前置詞のついている場合の形式である。

20(a) **With whom** are you going? (誰と…)

(b) **Who(m)** are you going *with*? (〃 〃)

上例は共格の **with** が WH 語を支配していて、WH 語が文頭へ出るに際し、一しよに文頭へ来る場合(a)と、文末に居残る場合(b)とである。どちらも正しいが、(a)は文語的で堅苦しい調子を帯び、(b)は口語的で **whom** は余り見られず、**who** が一般である。但し

By whom was America discovered?

のように、受身文の **Agentive Case** を示す **by** だけは必ず NP と共に文頭に移動しなければならない。こうした慣用上の知識は煩わしく、特に前置詞の文末残存は、日本語に全然類似した現象がないだけに学習の徹底が難しい。

WH 疑問文の学習に関わる第6の付随的問題点は、日本語の「何が」と「何かが」の酷似から起るものである。疑問と不定の語が、もともと日本語では起源を一つにしているので

何か → **something**, 何が → **what**

を混同する学生は多い。この事は

誰か → someone, 誰が → who
 どれか → something どれが → what, which
 どこか → somewhere どこが → where
 いつか → sometime いつが → when

にも通用する。事実

何か食べたい。 → *I want what to eat.

どこかへ行きたい。 → *I want to go where.

などの非文をよく見かける。

最後の問題点は所謂疑問副詞の用法である。例えば

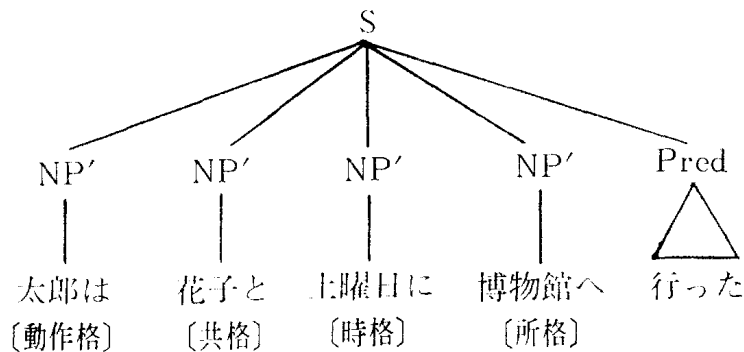
Where does he live? (In *what* place ...?)

Where will he go? (To *what* place ...?)

When will he come? (On *what* day ...? At *what* time...?)

に見られるように, where, when は格前置詞の意味を内蔵している。
 who や what にはそれがない。

日本語では動作格も対象格も, 所格も時格も一様に NP+K (格助詞) の形をとり, 述語へ対等の関係参加をする。



Where : NP' = NP+K

4つの NP' は Pred へ対等に関係するのだから, この4つの NP' の語順は必ずしも一定しない。従って, 日本語の疑問詞は

何	誰	どこ	いつ
<+N>	<+N>	<+N>	<+N>
<+pronoun>	<+pronoun>	<+pronoun>	<+pronoun>
<-human>	<+human>	<+location>	<+time>
<+WH>	<+WH>	<+WH>	<+WH>

と分析される語いで、品詞の差異はない。これも学習の干渉になり、

* Where did he go to?

* At when did he start?

などの非文を生む原因となる。

英語でも、Fillmore (1968)⁽⁸⁾ も言うように、格をもつ NP (英語では「前置詞+NP」の形をとる) が、深層では、日本語と同じようにそれぞれ述語に対する関係を表わしている。唯、所謂「主語+述語」の2核構文の確立と共に、語順が格関係を表わすようになり、動作格や対象格、与格などから、格を表わす前置詞が、表層で消失したのであろう。事実

Where do you come from?

などでは where が格前置詞を持つ名詞である。

従って名詞・副詞の差は表層的なものに過ぎないが、非文を生む結果には変りない。

(この点 howと why に関しては一味違っている。成程 how=in what manner, why=for what reason と理解すれば, where, when と同列に論じてよさそうだが、応答の焦点は通常 NP でなく、文叙述になる。この点 where, when の持つような名詞的性格が薄れ、極めて副詞的であると言えよう。

When did he start? He started on **Sunday**

Why was he absent? Because **he was ill in bed.**

従って乱暴に割れ切れれば下表のようになる。

	意味	形態		意味	形態
what, who	名詞的	名詞	何, 誰	名詞的	名詞
where, when	名詞的	副詞	どこ, いつ	名詞的	名詞
why, how	副詞的	副詞	なぜ, どうして	副詞的	副詞

日・英両国語の大きな相異は where, when の形態が副詞であることに在る。学習の干渉もこの点で著しい。

最後に X Questions の intonation に触れる。

(17)の例文に示したように、英語ではすべて下降調である。所が日本語では上昇調が一般であろう。(もっとも個人差や context により、下降調が珍らしくはない。尚この点、英語でも context 次第では上昇調をよく耳にするが。)

When will you start? ↘

いつごろ出発です ka. ノ

以上を纏めて次表を得る。

	英 語	日 本 語	差異 度	学習困難度	
				理解	発表
F	1. (a) 疑問変形により Aux+NP の語順と なる (b) WH変形により疑 問詞が文頭に出る (その結果主語疑問 文には do が導入さ れない) (c) intonation は下 降調	1. (a) 語順の変化はない 文末に ka を付す (b) 疑問詞の位置も変 らない (c) intonation は上 昇調が一般	大	中	大
	2. 疑問詞には名詞・副 詞の別がある (when, where は副詞)	2. 同じ (但し, いつ, どこは名詞)	大	小	中
M	1. 文中の未知の一要素 について, 聴者の情報 を求める	1. 同じ	小	小	小
	2. what と who, what と which に紛わしい 意味差がある	2. 紛れはない	中	小	中
D	1. 疑問詞を支配する前 置詞は文頭に出る場合 と, もとの位置に残存 する場合がある	1. 対応する事実はない	大	中	大
	2. 文頭の whom は口 語では who が一般で ある	2. 対応する事実はない	中	小	中

従って FMD 率は 1-2, 学習困難度は理解で B レベル, 発表で C レベル
と判断される。

8. Indirect Questions

(20)(a) I wonder whether Jack loves Betty.

(Jack は Betty を愛している (の) ka しら。)

(b) I wonder who(m) Jack loves.

(Jack は誰を愛している (の) ka しら。)

では疑問表現が文の一部としてはめこまれている。英文の疑問表現部分
は, (a)では Yes-No Question, (b)では X Question であり, それぞれ
I wonder の目的語になっている。即ち名詞節なのである。試みに「分割

変形によるテスト」を適用してみると、

(a) **What** I wonder **is** whether Jack loves Betty.

(私が疑っているのは「Jack が Betty を愛している ka」ということだ。)

(b) **What** I wonder **is** whom Jack loves.

(私が疑っているのは「Jack が誰を愛している ka」ということだ。)

のように明らかに合法文となる。日本語の場合にも「かしら」を「か（私は）知ら（ぬ）」の短縮形と理解すれば、英文と完全に軌を一にしている。この間接的な疑問表現部分を、直接の疑問表現と並べてみると、

Does Jack love Betty? → whether Jack loves Betty

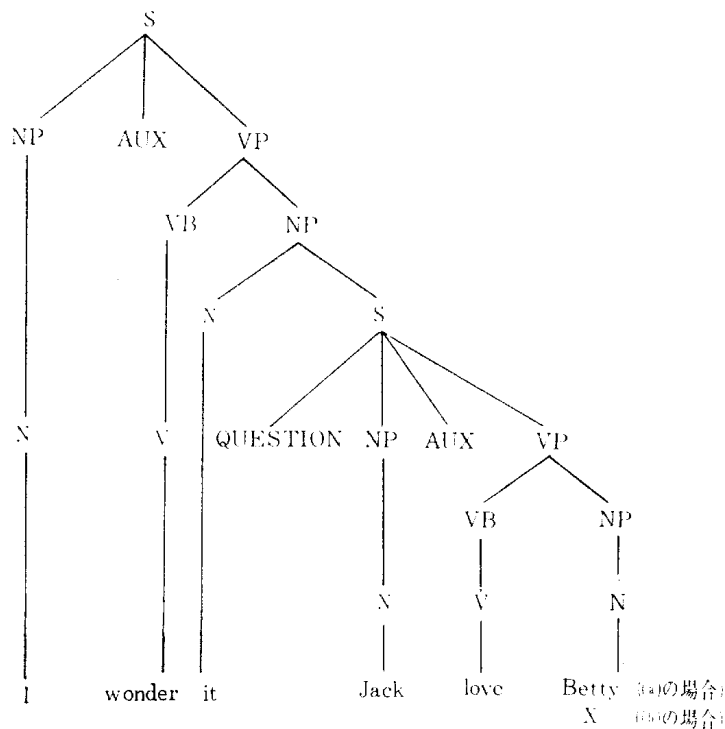
Who(m) does Jack love? → whom Jack loves

で明瞭なように

(a) 疑問変形は行われていない

(b) WH 変形は適用されている

(c) Yes-No Questions には whether (または if) が導入されるの3点が相違している。深層構造を次のように考えると、



- (i) (a) QUESTION が if か **whether** にとって代られる。
 (b) WH 変形が行われ QUESTION が消去される。
 (ii) 代名詞消去変形で **it** が消去される。

の2段階を経て表層へ出る。この点では直接疑問文よりも、疑問変形の無いだけ日本語に近づき、学習者には一見容易に見えるが、実際は「直接から間接へ」の学習順序が一般的であるため、一たん直接疑問形を学習した頭へ更にもう一つの学習負担が加わる印象を受ける。特に日本語が

間接疑問 = 直接疑問 + しら

と単純を極めるので、干渉はやはり大きい。

〈注〉

- (1) **whether** には往々 **or not** が呼応して添えられる。これは日本語でも「**ka dooka** しら」と添えられるのに似ている。

I wonder **whether** he will go **or not**.

(彼は行く **ka dooka** しら。)

- (2) 日本語では間接疑問部分が「の」で名詞化されることが多い。

彼は行く の **ka** しら、

これは英語の深層構造に存在した **it** が、消去されずに残った形と思えば、よく似た現象である。

このことは疑問副詞の場合にも何の変りもない。

I asked when he was going to start.

(私は彼にいつ出発するの **ka** と尋ねた。)

He explained why he had been absent.

(彼はなぜ休んでいた **ka** を説明した。)

しかし問題が一つある。それは関係代名詞と疑問代名詞、関係副詞と疑問副詞の紛らわしい用法と意味である。

I asked him **what** he wanted. (疑問詞)

I gave him **what**he wanted. (関係詞)

の差ぐらいなら、まだ理解も易しいが、

{ She asked me **what** sport I liked best. (疑問詞)
 { She gave me **what** little money she had. (関係詞)

になると、さまざまの混乱が生ずるだろう。

更に

- { I don't know **when** he will arrive. (疑問詞)
 { Tell me the time **when** he will arrive. (関係詞)
 { You never know **where** the two roads meet. (疑問詞)
 { A cottage stands **where** the two roads meet. (関係詞)

など紛れ易い構文を作る。尚一般に接続詞として扱う **when** も、生成的には at the time when の原意だから、

- { Tell me **when** he will come. (疑問詞)
 { Tell him so **when** he comes. (関係詞)

の紛わしさがある。

何れにせよ、この紛わしさは理解学習での干渉源である。以上を纏めて、

	英 語	日 本 語	差異度	学習困難度	
				理解	発表
F	1. 疑問変形は適用されない	1. 同じ	小	小	小
	2.(a) Yes-No Questions には ifか whether が導入される	2.(a) Yes-No Questions には ka (ka dooka) が導入される	大	中	大
	(b) X Questions には WH変形が適用される	(b) X Questions には ka と疑問詞が導入されるが、語順は変らない	小	小	小
	3. intonation は下降調が一般	3. 同じ	小	小	小
M	1. 疑問表現の名詞化	1. 同じ	小	小	小
D	1. NP として主語・目的語・補語となる	1. 同じ	小	小	小
	2. 関係詞と分布の重なるところで紛れ易い構文を作る	2. 対応する事実はない	中	中	中

FMD 率は 2 - 1 だが、学習困難度は関係詞との紛れも含め、構文自体が複雑になり勝ちなので理解学習で C レベル、発表学習で D レベルと判断される。

9. Pseudo Questions

本論の冒頭で触れたように、形態は疑問表現だが、必ずしも I ASK

YOU の意味あいを持たないものがある。

- (2) What? Have you done it? …驚き
 (何ですって。それは君がしたの ka。)
- Isn't that beautiful? …強い肯定
 (きれいではない ka。)
- Who knows? …強い否定
 (誰が知るもの ka。)
- Won't you come in? …誘引
 (お入りになりませんか ka。)
- How about going to a movie tonight? …提案
 (今晚映画はいかがですか ka。)
- Why don't you have some pills? …忠告
 (薬を飲んだらどう (ka)。)

など、さまざまの情感を表わしている。そしてそれぞれの訳文に見るように、日本語でもほぼ軌を一にしている。疑問表現が情意表現の裏がえしであったり、仮装であったりするものは、個別言語を越えて普遍的現象である。

Pseudo Questions と呼ばれる現象で、所謂 Rhetorical Questions も含まれている。従ってこの現象の学習は、個々の慣用表現の学習を除けば、本質的な問題はない。

ただ付け加えて置きたいことが2つある。その1つに所謂 Retorted Questions がある。

A: "Do you remember it?"

B: "Do I remember it?"⁽⁹⁾ (= Certainly I remember it.)

と相手の疑問表現をそのまま投げ返す形式のもので、「その質問はよけいな質問だ」と言う情感を背負っている。

付け加えたいもう1つのことは感嘆表現との紛れである。

- | | | |
|---|---------------------------------------|-----|
| { | What world is this? | …疑問 |
| { | What a world this is! ⁽¹⁰⁾ | …感嘆 |
| { | How tall are you? | …疑問 |
| { | How tall you are! | …感嘆 |

情感を背負う Pseudo Questions は既に感嘆文に紙一重である。しかし感嘆文は直接的な情感の表現であって、Pseudo Questions のような「裏返し」性はない。形態も異なり tone も違う。紛れ易い事実を指摘するにとどめ、深くは触れないで置く。

Pseudo Questions はさまざまな形態の疑問文が、特殊な意味を持つに至った、謂わば周辺的な場合なのだから、それらを纏めての FMD 率は合理的でないが、学習上の 1 項目として次表のように整理しておく。

	英 語	日 本 語	差異度	学習困難度	理解 発表
F	1. 各種の疑問表現	1. 同じ	小	小	中
	2. intonation は強い上 昇調が多い	2. 同じ	小	小	小
M	1. 驚き, 意外, 誘引, 強い否定, 強い肯定などの 情感の表出	1. 同じ	小	小	中
D	1. 疑問表現の形で, 聴者へ直接的に情感を投げつける situation に主として現われる	1. 同じ	小	小	小

従って一般の疑問表現学習の上に、特に Pseudo Questions として学習を uploads する部分は少ない。FMD 率も 3—0, 理解学習も A レベル。但し発表学習では、英文特有の各種の慣用表現に習熟しなければならぬので B レベルになろう。

10. Double Questions, Incomplete Questions, etc.

(23) Who kissed who?

(誰が誰にキスをした (の) ka。)

Who shall sit where?

(誰がどこに坐る (の) ka。)

のように 2 つの「疑問要素」(Focus) が同一質問文の中に見出されるものがある(次頁の図参照)。こうした疑問表現を Double Questions という。

のように、疑問詞を除いて、文の胴体部分を省略して了り構文がある。この省略された疑問表現形態を **Incomplete Questions** と言う。**Incomplete Questions** の中には慣用的なものが多い。

I'll tell you what. (what ⇨ something)

She has beauty, talent, wealth and what not.

(what not ⇨ everything)

(23)の訳文でも分るように、日本語にも類似した現象には事欠かない。

もう一つ

(24) “He is my tutor.” “Your what?”

(「あの人は僕の先生です。」「君の何(と言った)。」)

“She lost her key.” “She did what?”

(「彼女は鍵を失くした。」「彼女がどうしたって。」)

相手の言ったことばのうち、聞きとれなかった要素のみを疑問詞化して、疑問変形をせずに、そのまま投げ返す表現がある。音調は強い上昇調になる。この現象はそのまま日本語の疑問表現の形態そのものであり、日本語ならば何の不思議もない。

最後に、疑問の意味を強める語句に触れておきたい。**Strengthened Questions** とも呼ばれるものである。

(25) What **on earth** have you done it for?

(**一体**何のためにそんなことをした(の)ka。)

Who **in the world** is he?

(彼は**一体**誰(なの)ka。)

Why **ever** didn't you go with her?

(**一体**なぜ君は彼女と一しょに行かなかった(の)ka。)

に見られる太字体で示された語句は、疑問詞の疑念の強さを強調するものである。上例の他に **the hell, the devil, the deuce, in God's name, in the heaven's name, in the name of Heaven** などがある。その殆どが所謂「誓語」である。日本語では「**一体**」「**一体全体**」などがこれらに対応するが、英語ほど多彩ではない。

以上の事柄は疑問表現としては多分に周辺的事項であり、学習としても主として用語法の分野に在るので、詳細は割愛したい。

11. 検 証

以上、日本人学生が英語のさまざまな疑問表現を学習する際に生じ得る干渉や困難度を検討した。その予測した事項について、実際の学習場面で検証するため、本学体育学部の一年生諸君の協力を得て、次のようなテストを実施した。彼らの中には英語学習を不得手とする者も多く、成績は芳しくなかったが、逆にまた、困難点の様相をよく示してくれる結果ともなった。テストを受けたもの104名、そのうち無作為に4名を除いて100名の統計をとったので、表中の数字はそのまま人数でもあり、百分率でもある。

A. 次の英文の意味を日本語で書け：一

1. Don't you like apples? Yes, I do.

○ いいえ、好きです。	29%
○? はい、好きです。	15
× いいえ、好きではありません。	0
× はい、好きではありません。	32
× はいそうです。	17
× はい。	7

否定形疑問文に対する応答のし方が日・英両国語で違う事に基づく干渉を調べるのが問題の狙いであったが、予期された如く Yes の意味把握に失敗して、I do を「好きではない」とした者32名。「はい、そうです」と文

字面の訳を無頓着に出しただけの者17%、「はい」で遂に後が続かず、迷いの姿を露呈したまま絶句したもの7%。Yes と「はい」の短絡がもたらす干渉は意外に大きい。

2. You won't go with us, will you?

○ 行かないのですね。(念押し)	63%
× 行きませんか。(誘い)	11
× 行かないのですか。(疑問)	15
× 行くのですね。(念押し、意味は逆)	6
× その他	2
× 無 答	3

Tag Questions のもつ「念押し」の意味合いが理解されているかどうかを見る狙い。63%は先ず先ずの成績だが、それでも「誘い」や「疑問」の意味に取ったもの26%、同じ「念押し」でも意味を逆にしてしまった者

6%は、この構文の完全消化の難しさを物語っている。

3. What did you do it with?

○ 何で(もって)それをしたか。	20%
×? 何と一しょにそれをしたか。	6
× それでもって何をしたか。	15
× それと一しょに何をしたか。	24
× それとどんな関係があるのか。	5
× その他	17
無 答	13

文頭の疑問詞を支配する前置詞が、後置されている場合の構文把握を知る狙い。しかし do it のように漠然とした動詞を用いたため、徒らに意味の混乱を招いて、狙いの焦点をぼけさせてしまった。(write it ぐらいにすればよかったが、それだと逆

に意味の透明さに導かれて、構文の理解がなくても、正解が出てしまうのを惧れた)。何れにせよ、この位のことでこの混乱は、この構文の理解の難しさを雄弁に物語っている。日本語では格助詞が自分の支配する NP を離れることは無いのだから。従って with がすぐ傍の it を支配すると解したものが39%の多きにのぼったのも肯かれる。

4. I gave him what he wanted.

○ 欲しがっている物を	80%
× 欲しがっている何かを	5
× 何か欲しがっているので	3
× 何が欲しいかと聞いて	2
× その他	4
無 答	6

関係詞 what と疑問詞 what の弁別能力を見る狙い。文意におんぶ出来るので80%の正解。それでも「what=何」の短絡病が10%も居た。

5. How high is that mountain?

○ どれぐらいの高さ	95%
× 何と高い	3
× その他	2

疑問文と感嘆文の弁別能力を見るのが狙いだったが、殆んどの者が正解を出した。感嘆文と取ったもの僅かに3名。これはど

うやら語順の理解よりも、疑問符の存在がものを言ったらしい。

6. I don't know what he is.

○ 彼が何をやる人であるか	12%
○ 彼の職業を	10
○? 彼が何(もの)か	38
× 彼が誰か	14
× 彼のことを	24
× 現在の彼を	2

人に用いた what が身分や職業を問うことについての認識度合を見る狙い。はっきりこの認識を答案に示したものの22%。「彼が何か」「彼が何者か」のように、単語 what を表面的に訳しただけの38%の者は、who と

what の使い分けに正しい理解を持っているかどうか判定し難い。恐らく真の理解を欠いていると見る方が正しかろう。

7. Tell me when she will come.

○ 彼女がいつ来るか	53%	when を疑問詞ととるか、接続詞ととるかを見る狙い。一応正解は61%だが、このうち「彼女が来る時を」とした8%は、恐らく the time when の認識があつての結果ではなくて、接続詞として認識した上で、ただ
○? 彼女が来る時を	8	
× 彼女が来る時に	16	
× 彼女が来たら	7	
× その他	11	
無 答	5	

文意の上から無雑作に名詞化したに過ぎないだろう。とすれば、接続詞と理解したものは31%にのぼり、間接疑問構文の徹底は難しい。

8. Who knows?

○ 誰が知るものか(誰も知らぬ)。	2%	所謂 Rhetorical Questions の知識を見る狙いだが、こうした慣用表現は難しい。僅かに2名が知っていただけで、多くのものは単なる疑問文ととつた。そしてここでも「誰が」と「誰か」の混乱した認識が露呈
× 誰が知っているか。	56	
× 誰か知っている(ものはいる)か。	31	
× 誰だか知っているか。	5	
× その他	4	
無 答	2	

されている。この明らかに異なった概念が、たまたま日本語で似通っている計りに、英語学習でも根強い干渉を生んでいる。

9. Who shall sit where?

○ 誰がどこへ坐る	63%	Double Questions を正しく理解できるかを見る狙い。高校までの教科書には余り見かけない構文なので、とまどった揚句、where をわざと無視して
× そこへは誰が坐る	21	
× その他	5	
無 答	11	

there のように訳した者が21%も居た。疑問詞が2つ以上有り得る事実を馴れさえすれば、これは大きな困難点にはなるまい。(但し発表学習では、日本語の自由さに馴れている頭には、英語の複雑な構文上の制約が乗り越え難い)

10. Who in the world is he?

○ 一体誰なのか	5%
× 世界（この世）の誰	22
× 世界（この世）で誰	13
× 世界でどんな地位の人	4
× どの国の人	13
× その他	13
無 答	30

疑問詞の強意表現として慣用される *in the world* を知っているかを見る狙い。正解は僅かに5%。この知識は意外な程徹底していない。意味のつじつまを合わせるための苦心さんたん振りが見られる。

B. 次の日本語の意味を英語で書け：—

1. 花子がこの手紙を書いたのか。

○ Did Hanako write...	47%
○ Was this letter written...	4
× Does Hanako wrote...	5
× Did Hanako wrote...	7
× Does Hanako write...	8
× その他	20
無 答	9

基礎的な疑問表現が出来るかを見る狙い。心配していたように、こんな基本的な文でも、正確な表現に達したものは半数で、後の半数は実にさまざまな破綻を見せた。「その他の誤答」の内容も千差万別、多彩を極めていたが、殊に *tense* への無関心は

目を蔽わせる。尚表現学習面が理解学習面に較べて、困難度が一段と高いことは、無答の数が多い事実にも見られる。

2. 君がそれを書いた、そうでしょう。

○ You wrote it, didn't you?	40%
× You wrote it, did you?	3
× You wrote it, isn't it?	3
× You wrote it, don't (won't) you?	3
× You will write it, won't you?	4
× その他	32
無 答	15

Tag-Questions の表現能力を知る狙い。40%の者が正確な付加疑問形を添えていた、が前文の構文とは無関係に思いつくままの形を添えた者も多い。「その他の誤答」の内容は多彩で、整理がつか

ない。ただ *tag-questions* の知識が正確でないことは確実だったので一括した。発表力となると、こんな基礎部分でも正確さはなかなか修得できないようだ。

3. 誰がその手紙を書いたのか。

○ Who wrote the letter?	44%	主語疑問文が正しく書けるかを見る狙い。正解はやはり半数に満たない。一般の疑問文の場合と同様に did write としたものは18%, しかも did+NP+VP. の形が頭に固定している
× Who did write the letter?	18	
× Who did the letter write?	5	
× その他	20	
無 答	13	

ため the letter を did write の中へはさんだ者さえ5%居た。学習の般化現象であろう。

4. 君はどの季節が一番好きか。

○ Which season do you like best?	6%	疑問形容詞の用法を知っているかを見る狙い。兼ねて which と what の意味差の理解度も見たかった。従って
○ Which do you like best of all the seasons?	10	
○? What season do you like best?	10	
× What do you like best of all the seasons?	10	
× Which do you like the season best?	9	
× What do you like the season best?	15	
× Do you like the best of all the seasons?	16	
× その他	9	
無 答	15	

て表中の数字の中には、焦点外の微差は無視して一括されている。そしてこの数字から言えることは、(1) whichよりも whatの方が馴染まれていて想起され易いことと、(2)疑問形容詞としての形態 (which NP, what NP) は馴染まれていないで、文頭に which, what を単独で据えた揚句, NP の置き場所に苦しんで誤文を作ってしまうことの2点である。正解率は甘く見て26%, 無答の15%も大きい。疑問形容詞の正確な発表はかなり難かしいようである。

5. それはどれくらい (の時間が) かかるか。

○ How long does (will) it take?	8%	「数量を問う慣用表現」の習熟度を見る問題。正解は甘く見て16%と厳しい。How long? の定型が思いつかず、さまざまに工夫して破綻を見せている。
○ How much time does it take?	6	
○? How many hours does it take?	2	
× How long time does it take?	9	
× How many time(s) does it take?	17	
× What time does it take?	2	
× How time does it take?	14	
× How long is it?	10	
× その他	10	
無 答	22	

6. 君は誰と住んでいるか。

○ Who do you live (are you living) with?	22%	前置詞を伴う疑問詞が正確に書けるかを見る問題。Who...with? が圧倒的に多く, Whom...with? は案外少ない。
○ Whom do you live with?	8	
○ With whom do you live?	0	
○ Who lives (is living) with you?	17	
× Do you live with whom?	9	
× その他	16	
無 答	28	With whom...?

は遂に1人も居なかった。口語英語を教える比率が大きくなった結果であろう。

whom を文中に沈めたままの者は9%。無答の28%は、この構文の習熟し難いことを物語っている。

7. 私は何か食べたい。

○ I want something to eat.	13%	既に A. 8 で「誰が」と「誰か」の混同を見た。この問題は、逆に発表面で、この似通った日本語の干渉が出ることを期待した。結果は誠に顕著であった。表中に見られる如く、さまざまな形で what があらわれる。その率は23%と大きい。尚
○ I want to eat something.	34	
× I want to eat what food.	7	
× I want what to eat.	6	
× I want to eat what something.	2	
× What I want to eat.	8	
× I want to eat anything.	5	
× その他	13	
無 答	12	

some と any の区別のつかないもの5%も、別の観点から示唆的であった。

8. この夏君はどこへ行ったか。

○ Where did you go ?	62%	疑問副詞の発表力を見る狙い。62%は先ず先ずだが、相変らず tense への無頓着が10%もある。「どこへ」と「どこかへ」の混同が、前問に較べると非常に少ないのは、日
× Where do you go ?	10	
× Where you went ?	4	
× Did you go anywhere ?	2	
× その他	13	
無 答	9	

本語の「ど」と英語の疑問詞との直結が強く、「どこかへ」の英訳に where が多発する惧れはあるが、「どこへ」の英訳に anywhere は出難いこと、それに anywhere は単語としても馴染みの薄い方であること、の2つの理由によると思われる。

9. 彼女は誰だか君は知っているか。

○ Do you know who she is?	47%
× Do you know who is she?	22
× Who is she, do you know?	6
× Who do you know she is?	4
× その他	8
無 答	13

間接疑問文が正確に書けるかを見る問題。約半数の学生が正しい形を綴ったが、予期された…who is she の語順も22%と大きい。日本語と同じ表現順序で Who is she,

do you know? と幼稚に連ねた6%, do you thinkが疑問文の中に沈むのと軌を一にして do you know も文中に沈めたもの4%。基礎的な間接疑問文も、さまざまな干渉を受けて、とかく破綻し勝ちである。

10. 彼が来るかどうか私は知らない。

○ whether he will come (or not)	15%
○ if he will come	8
× that he will come (or not)	36
× what he will come	11
× which he will come	3
× その他	16
無 答	11

Yes-No Questions の間接形に ifか whether が正しく使えるかを見る問題。whether を用いたもの15%, その半数が or not を付していた。if を用いたもの8%。whether の方が馴染め

るらしい。誤答の主なるものは接続詞として that, what, which, when などを用いていたが、中でも that は圧倒的に多く、36%に達している。「つなぎには that」という固定観念があるようだ。that でつなぎ乍ら or not を付した11%の者には、記憶の混乱がある。何れにせよこの構造も正確な発表に至る道は険しい。

<注> 上記のすべての表の統計数字は、焦点となっていない部分の微差、微謬は無視して纏めたものである。

以上の検証の結果は、予見した問題をほぼ全的に実証した。ただ出題の不適切のため焦点外の要素が混入して、論点の実証がぼけた部面が僅かながら存在したことは否めない。何れにせよ、実証された顕著な項目を列挙してみると、

(1) 日本語の簡明な疑問表現に馴染んだ頭には、英語の疑問表現の形態は複雑に過ぎる。従って理解学習はまだしも、発表学習となると、最も基礎的な疑問文も、なかなか正確には文構成ができず、多彩な破綻を見せる。

(2) Yes-No Questions への応答のしかたは、日・英両語に本質的な

認識の違いがあって、徹底は至難である。

(3) Tag-Questions の添え方にも、(1)に基ずく同様の破綻が拭えない。

(4) X Questionous では(1)に加えて WH 変形の難しさが重なり、主語疑問の例外的形態が上載せられるので、発表面の困難度は一層高い。更に which と what, what と who, how long などの慣用的語法上の知識が混乱に拍車をかける。更に加うるに、格前置詞の文頭進出や文末残存の事実は、日本語に全く類似現象がないので、大きな干渉となっている。

(5) 日本語の「何が (what)」と「何か (some)」が似通っている事から生ずる干渉が、疑問文構成に思いがけないつまづき石となる。

(6) 英語の間接疑問文は直接疑問文よりも、「疑問変形」がないだけ、日本語に近づいた形態を持ちながら、学校での学習順序が直接疑問文→間接疑問文となっているためか、「一たん学習した事項の一部を消去する学習」となり、困難度のレベルは反って直接疑問文より一段高くなっている。

何れにせよ、論理的には似通った意味分野を共有しながらも、日・英両語のもつ形態の大きな差異と、Yes, No に見られる本質的な認識の相違がさまざまな干渉を生んで、英語疑問文の学習に多彩な問題点を作っていることは明らかである。こうした事実の分析を何らかの形で、英語学習の現場に生かし、学習の効率を高めたものである。

<注>

(1) O. Jespersen (1924) : The Philosophy of Grammar, p. 302

(2) Ibid.

(3) 国語学会編 (1955) : 国語学辞典 p. 245

(4) S. Tsuiki (1977a) : 「英語の否定表現学習上の問題点」参照

(5) R. Lado (1957) : Linguistic Across Cultures 及び E. Kleijans (1958) : A Descriptive-Comparative Study Predicting Interference for Japanese in Learning English Noun-Head Modification Patterns 参照

(6) S. Tsuiki (1974) : 「英語のアスペクト学習上の問題点」参照

(7) R. Jacobs & P. Rosenbaum (1970) : 基礎英語変形文法 3-4, p. 88

(8) C. Fillmore (1968) : The Case for Case

(9) O. Jespersen (1924) : op. cit. p. 304

(10) O. Jespersen (1940) : A Modern English Grammar, Part V, p. 499